

当面のスローガン

- 本年こそ「人権侵害救済法」を制定させよう!
- 狭山再審闘争の勝利をかちとろう!
- 続発する差別事件の糾弾を徹底しよう!



発行所
解放新聞和歌山支局

〒640-8314
和歌山市神前 405-3
TEL 073-473-2301
FAX 073-473-2302

発行責任者
藤本哲史



あいさつする野口理事長



正しい情報で判断しようと訴える村山准教授

第21回和歌山・人権啓発研究会
空間的距離をあげ、開催
新型コロナウイルスと人権

新型コロナウイルスと人権」をテーマに、第21回和歌山・人権啓発研究会が1月28日、和歌山県勤労福祉会館・プラザホープで感染対策を実施しひらかれ、約110人が参加した。

はじめに、主催者あいさつで野口道彦・同研究所理事長から、コロナ禍で三密を避けるためにソーシャルディスタンス(社会的距離)とよく使うが、本来の使い方や意味は、社会心理学でいう「集団と集団の親密さ、距離をとる」ための社会的距離尺度をいうが、これは差別せよということになる。コロナ禍の今、社会的距離と使う意味がよくわからない。おそらく、社会心理学者の意見が通らなかつたんだろうと思う。三密を避けるのであれば、空間的距離を取りましょうといえたい。メカニズムがなぜおこるのかを考えるのがこの研究会の意義だ。二人の先生の話から考え、どのように行動すべきか、差別を克服するためにどうすべきかを考えて行動してほしいとあいさつした。

つづいて、講演1「新型コロナウイルス禍における差別の理解と解消に向けて」と題して、村山綾・近畿大学国際学部准教授から社会心理学者として、新型コロナウイルスにかんするさまざまな観点から問題をあぶりだし、多くの人に当てはまる傾向は何か、ということがあきらかにされた。村山准教授は、感染者を差別することで、一時的なフラストレーションの解消や心の安定を得るかもしれないが、長期的にみればネガティブな帰結しかもたらさない。差別のある現社会では、自身が感染しても周囲に伝えないと考えるもおかしくない。そうする

と、医療的サポートが必要の人が適切な治療を受けられない、行動履歴を隠蔽するという問題が噴出し、感染拡大を助長することはまじがない。私たちは、感染してもおかしくない意識し、不要不急の判断は第三者が容易にしてはならない。そして、情報は断片的であるため、信頼できるデータにふれる機会をもつことをしっかりと意識しなければならぬと説明した。

つぎに、講演2「新型コロナウイルスによりあぶり出された既存差別の問題」と題して安田賢行・研究員



安田研究員は1人ひとりと語り、価値観を認識することを訴えた。

から、価値観やものさしに合わない人を「不謹慎な人」として判断し一般化されているが、ふつうや当たり前一人ひとり違うことを認識すべき。差別や嫌がらせ行為は、自らもそれを招きいれる状況をつくりあげているということを認識しなければならぬと訴えた。

故・瀧口秀光
県連顧問を偲ぶ

(1)
昨年12月27日。瀧口県連顧問・企業連合会理事長が逝去された。瀧口顧問は、1974年の県連再建へ重要な役割を果たし、再建以後、県連組織と運動の構築への先頭に立ち続けてきた。また、企業連理理事長として県内の自営業者の育成と発展に尽してきた。瀧口顧問の人生は、常に部落解放とともにあった。今、あらためてその歩みを多くの人びとと共有したい。(以下、文中敬称略)

瀧口顧問は、1939年(昭和14年)2月3日、和歌山市平井で生まれた。5人兄弟(男2人、女3人)

の4番目である。ときは、アジア・太平洋戦争の末期で、生活や人権に関わって非常に厳しい時代であった。戦後、中学校を卒業するとすぐに大阪の化粧品会社に就職するが、数年後に平井に帰り、塗装職人として働くようになった。その後、独立し結婚をして、3人の子どもに恵まれ、塗装業として平坦な日々を送っていた。そんなとき、人生を大きく変える出会いがあった。

抗ノ瀬の藤本正明、中澤敏浩、中澤猛の3人だった。藤本はその生涯を部落解放運動にかけた人であり、中澤敏浩は後に県連執行委員長に、猛は後に県連書記長・

(2)
当時、県内の部落解放運動は、混迷のなかにあった。部落大衆の思いから遊離し、特定政党に傾倒する県連の一部幹部に支配されていた。そして、本部や全国の仲間と対立することも度々であった。そんな状況から脱し、運動の再生を果たすことが藤本たち3人の思いだった。瀧口は、そんな3人に共感し、地域で7人の同志をつくっていった。

さて、1979年。藤本らが中心になり『部落の自営業者を組織し、その育成と安定をすすめるなかで、部落解放運動の再生への原動力となる』ことを目的に「和歌山県同和地区企業連合会」が結成され、平井の7人も参加していった。この頃の瀧口は、市内の三番丁の企業連事務所を拠点に「解放新聞」の販売や配布、県内の部落へのオルグなど、塗装業のかたわら連日、専従者のように行動していた。そして「部落解放同盟平井支部」の結成への準備をすすめるが、県連の返事が「すでにある楠見支部と調整を」ということだった。楠見支部というのは、地域外に住む出身者を中心

(2ページへ)

頑健

国連総会でカタール王国の王妃の提案で、4月2日を「世界自閉症啓発デー」と決議され14年目をむかえる。ようやく、多くの人に認知されてきた。理解が深まったひとつに、和歌山城天守閣がシンボルカラーである「ブルー」にライトアップされるようになったからか。毎年、子どもを連れてライトアップされる意味を話しながら眺めている。このように、多くの人に認知されはじめたが、自閉症を正しく理解するまでにはいたっていないのが現状だ。自閉症は、発達障害のひとつに分類され、近年は自閉症スペクトラム障害とも呼ばれるように、症状の表れ方は千差万別だ。

映画「自閉症の僕が跳びはねる理由」が4月2日から全国で公開された。13歳の時の東田直樹さんが自閉症の内面をはじめ綴った一冊をもとに制作された映画だ。そのなかに「何が一番つらいですか」という問いに「そばにいてくれる人、どうにかぼくたちのことを悩まないでください」と記されている。親なら悩んで当然だ。しかし、それ以上に自身では押さえられないパニックやこだわり、振り回され、疲弊し、大切な家族のことを思い、悩んでいるのだ。

十把一絡げに自閉症といっても、千差万別だ。個々それぞれに個性や人格がある。それらを認め、共有し、生きる力に変換し伸ばす学校教育のなかで育ってほしいと切望するのだが...

(A・H)